



共有意思決定のためのコミュニケーションの手引き

リスクについてのコミュニケーション

再発リスクについて伝える場合...

治療過程について事前に患者に何を知らせるべきでしょうか？

- 術後に再発リスクがあること、また、化学療法がすべての患者で同じように有効であるとは限らないことを説明します
- 化学療法の後に内分泌療法だけではなく他の治療が行われる可能性があることを強調します

遺伝子発現検査で得られる結果について、どのようなアドバイスをするべきでしょうか？

- 遺伝子発現検査の有用性を説明する場合は、検査結果から予想される経過を患者が十分に理解するよう徹底し、どんな結果でも受け止めて対処できることを確認します
- 患者が遺伝子発現検査を受けたくない場合:
 - 内分泌療法だけでも有効であることをしっかりと説明します
 - 患者が自分の判断に納得し、変更するつもりがないことを確認します

共有意思決定の会話を記録に残すべきでしょうか？

- 患者と共有した意思決定をすべて詳細に記録し、記録内容について患者からも承認を得るように徹底することが、臨床医と患者双方の利益のために重要です
- 患者が重大な決断を下す場合には、必ず署名をもらって下さい

4個以上のリンパ節転移が認められる患者には、具体的にどのようにアドバイスすべきでしょうか？

- 高リスクではあるものの多くの治療選択肢があることをしっかりと説明します
- 治療選択肢を多く追加するほど、リスクが低くなり転帰が良くなる可能性が高いことを伝えます

残留リスクについて伝える場合...

- 局所腫瘍量が多い患者(例えば巨大腋窩腫瘍)には、ネオアジュバント療法の必要性を説明します
- 目標とする病理学的完全奏効(pCR)について説明する際は、完全奏効に至らなくても、再発リスクをさらに低める他の治療選択肢を続けて行えることを患者に必ず理解してもらいます
- 生殖細胞系列のBRCA遺伝子検査とその結果が患者と患者家族の双方に与える影響について、患者にアドバイスします
- 患者にBRCA変異が認められる場合には、カウンセリングを受けられるようにします

重要なポイント

- 患者は、治療について共同で決断するために、リスクを十分に理解している必要があります
- 追加検査は、結果が良くても悪くても受け入れることができる患者にのみ提案します



治療についてのコミュニケーション

治療選択肢について伝える場合...

各治療選択肢について知らせるべき重要なポイントは何でしょうか？

- 適切な用語を使って、各選択肢が有効となるステージと対象者を説明します
- 副作用について話す際は、用量の調整、薬剤の追加、支持療法などによって副作用を管理できることを強調するようにします
- 減量を選択する場合は、治療が引き続き有効であることを患者に知らせます
- 自分が推奨する治療選択肢を患者に説明し、アドバイスに基づいて患者が決断できるようにします

どれくらいの情報を事前に伝えるべきでしょうか？

- 様々な治療ラインや選択肢を段階的に説明して、患者が圧倒されないようにすることが最も大切です
- 理解度を確かめるために、説明した内容を患者に要約してもらうことも効果的です

特に、長期に及ぶ治療へのアドヒアランスを高めるために、何ができるでしょうか？

- 患者が、命に関わる/急を要する副作用と自宅で管理できる副作用とを区別できることを確認します
- 不安がある場合は医療チームにいつでも相談できることを説明して、患者を安心させます

GI毒性などの一般的な副作用について、どのように伝えるべきでしょうか？

- 下痢などの副作用はこれまでの経験とは異なる可能性が高く、処方された薬をできるだけ早く服用しなくてはならないことを事前に理解してもらいます
- 副作用が大きな問題になる場合には用量を調整することができ、それでも有効性は損なわれないことをしっかりと説明します

頻繁なモニタリングを始めるべきでしょうか、あるいはフォローアップの予約について患者の意向を聞くべきでしょうか？

- 最初は、定期的なフォローアップを予定します。患者が副作用を管理するのに慣れたら、頻度を下げるか必要に応じて患者に予定を決めてもらってよいでしょう

意思決定ガイドを使うべきでしょうか？

- 製薬会社が作成する意思決定ガイドには、副作用などに関する最新データが記載されており、役立つ場合があります
- 共有される情報は、可能であれば各患者に合わせて調整するべきです
- 各治療の長所と短所、そして副作用の一覧は、非常に役に立ち、特に新しい治療法についての患者の意思決定の助けとなり得ます

重要なポイント

- 新しい治療法を用いると新たな副作用が起こりますが、用量の調整、薬剤の追加、支持療法などによってこれらの副作用を通常は管理できることを強調します
- 治療過程の全体を通して、臨床医と患者が情報を共有してコミュニケーションをとり続けることが必要です



<https://bit.ly/eBC-SDM-PDF>